

「甌島の二型アクセント」を書き上げた後の3月29/30日に甌島・平良集落で談話音声資料(1時間弱)を収集しました。

上村(1941)で甌島主流外アクセントとして記述されているものの一つで、鹿児島県立図書館方言ライブラリには談話音声資料がない方言です。

上村の記述のとおり、重起伏がないアクセントで、語声調の配列は鹿児島方言と同じで次のようになります。

A型 L+HL      B型 L+H}

鹿児島方言と異なるのは、文節末音節が長い場合で、A型ではHL、B型ではLH~MHの曲調となります。B型では、丁寧な発音でLH、早い発音では音節全体が高く聞こえるMHで揺れます。文節末の音韻論上は短い音節がイントネーションによって伸びた場合にもA型でHL、B型でLHの曲調が出ます。(例: アス[ダー] 「遊んだ(A型)」 アイ[[ダー 「歩いた(B型)」)

境界声調は、B型文節末ではほぼ一貫して下降)が出ます。

「甌島の二型アクセント」で甌島主流方言で重起伏に先行する祖形として仮定した、

A型 \*M+HL      B型 \*M+LH

との新古関係は判断が難しいところです。末音節が長い場合の声調の音節配分は平良方言も他の甌島方言とよく似ていますが、B型末の下降境界声調が、なぜ生じたか/失われたかの説明がうまくいきません。

平良集落については、言語外の特長な条件があることがわかりました。平良は、中甌島(地元での呼称は平良島)唯一の集落ですが、現在も避難港として機能する良港である平良港は、本来は池であったのを、海岸を掘削して海とつなぎ、1799年に薩摩藩によって開港されたもので、江戸時代には貿易港としても繁栄したようです。郷土資料によれば、開港以前から集落自体は存在したようですが、港のまわりの平地は狭く、中央と港沿いの2つの車道以外は人一人通れる程度の幅の路地を隔てて住宅が密集している集落で、開港によって人口動態にかなりの影響があったことがうかがわれます。開港後10年余りを経た時期の伊能忠敬の調査では、平良の戸数は地頭仮屋や武家屋敷のある中甌島の2倍以上に達しています。このような急激な人口変動が平良の方言に影響した可能性は否定できません。(ただし、アクセント以外の語彙・文法には特に甌島以外の要素は見あたりません。)

平成4年に上甌島と中甌島間の架橋が完成し、陸上交通の孤立が解消しました。この10年で中学校と小学校が相次いで閉校となり、6キロ余り離れた中甌島の一体化が進むものと思われます。中甌島と下甌島間の架橋工事も現在進行中です。

上村(1941)のもうひとつの主流外アクセントである江石方言(主頂点 - 副頂点の順の重起伏アクセント)については、時間の都合で、生え抜きの話し手と会って次回に談話を録音させていただく約束をただけで終わりました。7分程度の録音ですが、主頂点は副頂点の直前で1音節卓立で、長い文節ではかなり後ろ側までL+が伸びます。主頂点側が卓立する場合と副頂点側が卓立する場合の揺れがあるようです。